

2018 年度立命館附属校・提携校 社会科授業研究会《技の習得》

附属校教育研究・研修センター

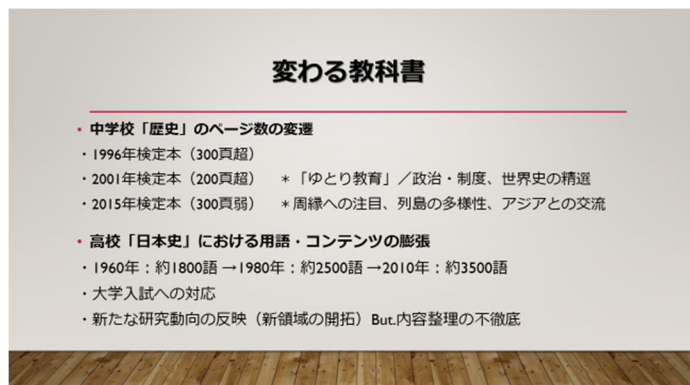
12月15日(土) 朱雀キャンパスにおいて、社会科授業研究会《技の習得》を実施した。

京都教育大学 教育学部講師 中村 翼 先生からテーマ「映画『もののけ姫』から考える歴史教育」について講演頂いた。参加者は6名(宇治2名、慶祥1名、教職大学院3名)であった。

【研修の記録】

はじめに、本研修の主題である「映画『もののけ姫』で考える歴史教育」に入る前に歴史学の基本的なスタンスや教科書のコンテンツ膨張など、現在の歴史教育が抱える課題について講師の中村先生より簡単に説明があった。また、コンテンツの膨張によって生徒・教師ともに消化不良のまま授業が行われているのではないかと指摘があった。一方で、膨大なコンテンツを精選する試みが紹介され、時代にあった歴史教育の新しいコンテンツを創造していくことが必要であることが強調された。その新しいコンテンツの一つとして「もののけ姫」があると述べ、本研修の主題へと入っていった。

まず、「もののけ姫」の時代設定（15世紀後期～16世紀初頭）や舞台設定（中世日本の「エミシノ里」⇔「東北」から「ヤマト」⇔「日本国」へ）について説明があり、環境・差別・ジェンダー・アジアといった観点を学ぶことができる日本中世史の入門として最適であると述べられた。続いて、日本の中世は、人間の時代と神仏の時代の二つの側面から捉えることができる。前者は、人間の身体への注目や荘園の形成・拡大など自然環境に対する「開発」など理性を重視するようになってきたことを示す。一方で後者は、疫病や飢饉など生活や技術水準の限界があり、神仏の存在感が大きいことであることを表している。その二つの側面が共存しているのが日本の中世の特徴であることが強調されていた。その顕著な例として中世仏教が挙げられた。中世の寺院は、文学・法学・工学などといった知識を子弟に伝えるという社会的役割を果たしているなど、「知」を武器としていた。例として、中世仏教の坊さんが農作の技術を教授しつつ、豊作祈願や農耕儀礼といった祈りを行うという「合理性」をもった信仰であることが紹介された。また、このような知識が文献を用いて伝承されたため、文字の読み書きができるお坊さんが独占し、知的な信仰である中世仏教が力をもったと強調された。



続いて、中世仏教の衰退について説明があった。荘園の拡大など開発による自然災害、飢餓、戦争といった問題が生じたが、それに対してお坊さんの知識では対応ができなくなった。また、軍事技術などある側面でお坊さんより知識のある者の出現などによって中世仏教の衰退が起きたと指摘された。そして、飢餓や戦争からの生存するためのセーフティネットとして村が誕生したことが述べられた。このセーフティネットとしての村が「村社会」といわれる日本社会のしくみを形成し、それを維持するための「家」制度も誕生した。これが「村」「家」といった強固な団結を生み、排除され差別される「よそ者」（未婚の女性など）や「業病者」を作り出したと指摘された。

このような、日本の中世を現実感のある世界観で表現しているのが映画「もののけ姫」である。例えば、自然環境に対する「開発」による環境破壊と信仰の衰退は、作中の猪神・山犬の神の「みんな小さくバカになりつつある。このままではわしらはただの肉として人間に狩られるようになるだろう」といった発言に表現されている。

他にも、「人間の時代」でもあり、「神仏の時代」でもある中世を「たたら場（人）対シシ神の森（神）」の対峙で表したり、神仏を介在させない自然に対する人間の管理という近世を「エボシの村・アシタカ（人）とサン（人）・森」の共生といった里山を表現したりと、「もののけ姫」の場面を示しながら具体的な説明がされた。

参加者は、新たな考えや価値観を獲得するなど多くの発見があったように感じる。このような新しいコンテンツを活かし、生徒に本質を理解させ考えさせる授業を行っていくことが求められている。そのような授業を行うための多くのアイデアが詰まった研修であった。本稿では中村先生の話された内容を十分に紹介できていないが心残りであるがここで終えたい。

（記録 立命館大学 教職大学院 M2 山本 衛）

（編集 附属校教育研究・研修センター 羽田 澄）

